

科学言説的アイコンとしての フロイト・心理学及び精神分析

——両大戦間期アメリカの大衆向け雑誌・文学における
フロイト及び心理学のイメージの受容について——

小 倉 恵 実

要 約

両大戦間期のアメリカで出版・発表された大衆向けの雑誌や小説の中では「フロイト」や「心理学」「精神分析」と言った言葉がしばしば登場する。小説や戯曲などの文学の中ではフロイトの理論やフロイトという人物について、読者の側が予めある程度の知識を持っていることを前提として書かれたものが多く、大衆向け雑誌の中ではフロイトの理論や精神分析が誤用されたり心理学そのものが墮落してしまったりしていることを嘆く論調のものが多数見られる。これは当時のアメリカの社会事情や人々が持つ不安を如実に表しているものである。

キーワード：両大戦間期アメリカ文化史、フロイト、精神分析、大衆雑誌、心理学

1. はじめに

本論は第一次世界大戦及び第二次世界大戦の間（以降両大戦間期と記す）における科学者以外の識字のある大衆の中でフロイト、及び精神分析がどのように受容されていたかを敷衍するものである。引用史料として、小説や「識字のある大衆」向けの雑誌の中での記事から特にフロイトについて述べられたものを使用した。これらの分析から、当時の「識字のある大衆」はブームとも言える状況に置かれていた「フロイト現象」をどのように捉えていたかが本論の狙いである。

2. アメリカ合衆国とフロイト

～歓迎する市民たちと興味を惹かれず渡航した本人～

ジグムンド・フロイトに関しては『夢判断』（1900年出版；英語版の出版は1913年に Macmillan 社より出版）や『精神分析入門』（1917年出版；英語版の出版は1920年に BONI AND LIVERIGHT PUBLISHERS より出版）などの著作が精神医学の専門研究者だけでなく、アメリカ合衆国においては特に南北戦争後には Lyceum Movement が各地で巻き起こり、識字のあり高等教育を受けた人々以外でも Lyceum で巡回説教師もしくは識者の講演を聴くことに

より、最新の学術情報や議論の機会を視覚的な文字に依らずに取得できたという、他の地域には見られない特徴が挙げられる。これが良くも悪くもアメリカの民主主義の屋台骨になっていることは言うまでもない。

そんな中、1909年にフロイトはカール・グスタフ・ユングと共に、クラーク大学（Clark University）からの依頼を受け、初めて大西洋を渡航することになるが、これがフロイトにとって最初で最後の北米地域の訪問であった。このことは、この渡米以降も、主に西部のネイティブ・アメリカンの居住区の景観や彼らの語る物語に自らの研究対象を見出し何度も渡米をしたユングとは異なる点である。

1909年にクラーク大学で行った講演は「クラーク講演」と称されており、G.スタンリー・ホールが初代学長を務め、同大学が心理学を高等教育の中でも特に重要視した象徴と考えることが出来よう。その他、フロイトが講演を行った地域はニューヨーク、ボストン、ナイアガラ・フォールズなど市民による Lyceum 活動が特に盛んであったアメリカ北東部であり、各地で行われた講演において、フロイトはドイツ語で講演を行ったにも関わらず、その後に出版された英語版の講演集が大衆の人気を博し、聴衆及びメディアからの熱狂的な支持を受けた¹⁾。

この時の熱狂に瞠目したアメリカ各地の研究者からメディア、聴衆に至るまでがこの第一回目の渡米以降、何度もフロイト本人に再渡米を打診した。これはフロイトの打ち立てた心理学が世紀転換期当初は「出来立ての学問」であったと同時に、コペルニクスが地動説を唱えたように、フロイトの唱えたリビドー説や自我・エス・超自我のからなる精神構造論は、それまでの思想体系を揺るがす画期的な特徴を持っていたことが専門研究者だけでなく識字のある大衆をも「フロイト」という巨人を渴望した理由でもあろう。

しかし、フロイト本人はアメリカ合衆国に関してはそれ程研究対象としての魅力が無いと考えており、最初の渡米後のアメリカ人関係者からの再三の招聘依頼も断り続けた。アシュケナジーであったために大学で教鞭を執ることが難しいにも関わらずウィーンで開業医として患者と向き合いながら自身の理論を深めていった。1923年に67歳で白板症を発症後、数十回にわたる癌の手術を受けていたなか、1938年にアドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツがアシュケナジーを学会から追放を決定した際、弟子の勧めに従いウィーンからロンドンに亡命した。この時の亡命に協力し、深く関わりを持っていたのが当時、駐フランスアメリカ大使であったウィリアム・ブリットだった。フロイトは翌39年にモルヒネによりロンドンで安楽死をするが、イギリスへの亡命に深く関わったのがアメリカ大使であったということは、反ナチスという政治的な側面があったにせよ、当時のアメリカ人がフロイトという人物をいかに強く支持していたかを裏付ける証拠となるのではないだろうか。

3. フロイトと文学との関係

本章及び次章ではフロイトの議論が科学的に研究者の間でどう批判されていたかではなく、「フロイト」という偶像が科学言説の一つとして心理学以外の分野にどのように反映していたかを敷衍していくのが目的である。よって、フロイトの科学言説が最も多くの大衆の目に触れやすい文学や識字のある大衆向けの雑誌（学術専門雑誌ではないもの）の中でどのように展開されているかを見ていきたい。

(1) F・スコット・フィッツジェラルド

言うまでも無く、フィッツジェラルドはアメリカ文学のロスト・ジェネレーションの巨人であるが、彼が“The Roaring 20s”と謳われた資本主義と個人主義、伝統社会の狭間で葛藤する兩大戦間期の若者の姿を描いた作品の中の一つとして1934年に発表された“Tender is the Night（邦題：『夜はやさし』）”が挙げられよう。

この長編小説の中では主人公のディック・ダイヴァーが精神医学をより深く学ぶため、アメリカ合衆国から大西洋を渡ってヨーロッパで研究を続けているという設定がなされているため、否が応でも「心理学」や「精神医学」、そして「フロイト」という単語は其処此処で散見される。小説のあらすじとしては、精神医学を志したディックが滞在先のスイスの病院で統合失調症と診断されたニコール・ウォーレンに出会い、「治療の一環として」結婚するが、その後ディックが酒に溺れてしまい、またニコールも他の男と浮気をしたために結局結婚が破綻してしまうという、ディック＝フィッツジェラルド及びニコール＝ゼルダに置き換えればフィッツジェラルドの破綻した家庭状況をそのまま反映したような作品となっている。

Scribner's Magazine というカラーイラスト付きの月刊雑誌（当然、読者は識字があるアメリカ人に限られるが、カラーイラストつきという点から現在で言う大衆雑誌に近い位置に置くことができる）に1934年の1月から4月に渡って連載されたこの小説の中において、フィッツジェラルドは注釈もつけずに何度もフロイトの名前を小説のキャラクター達が交わす会話の中で出している。

「頭も良さそうなので、フロイトを読ませてみたんだ。もちろんそうたくさんではないが、彼女（引用者注＝ニコールを指す）はとても興味を持ったようだった。」（ディックと小説上の登場人物フランクの会話の中のフランクの台詞より）²⁾

「彼（引用者注＝小説中に現れる人物バーソロミュー・テイラーのことを指す）はとても愉快だったよ。奴と俺（引用者注＝ディックを指す）とが並木路で握手している姿なんぞはなかなかよかったぜ。ジグムンド・フロイトとウォード・マカリスト（原注＝当時ア

メリカで著名だった社交家の名前)の会見みたいだったよ」(ニコールに対するディックの台詞より)³⁾

「考えてみてくれないか、ディック」フランツは一生懸命に説いた。「精神病学の本を書く時には、実際に患者と接触する必要があるんだ。ユングも書いてる。プロイレルも書いてる。フロイドも書いてる。アドラーも書いてるよ——それに彼らは、常に精神病患者と接触していたんだ」(フランツのディックに対する台詞より)⁴⁾

このような小説の中の一節から、フィッツジェラルドは自らの小説の中でフロイトの名前を何度となく引き合いに出しても、この小説を読む読者の側には「フロイト」という言葉に含まれた隠喩を理解するだけの知識を持っているものとして想定されていることが判る。つまり、この時代の大衆雑誌の読者層はフロイトに関して、少なくともどのような概念を提唱した人物だったのかについて、固有名詞を出されただけで察するだけの知識を持っていた、もしくはそれだけの文章に触れる機会があったと考えて良いのではないだろうか。

ここで、読者層とは直接には関係性は薄いかも知れないが、アメリカの国立成人読み書き能力査定 (NAAL: National Assessment of Adult Literacy) の調査によるアメリカ人の識字率の変化を示しておきたい。

表1は世紀転換期から両大戦間期の間に非識字率が全体で13.3%から4.3%に激減し、特にアメリカ生まれの白人においては1930年の時点では1.6%と殆どのアメリカ生まれの白人の14歳以上が文字の読み書きが出来るということを示している。また、ジム・クロウ法などで教育機会の差別化は受けていたものの、黒人専用の学校や職業訓練学校、黒人大学の努力が1890年には半数以上が非識字であった黒人が1940年には11.5%に激減している証左となっている。この表でより問題にされなければいけないのは所謂「新移民」と呼ばれた、東欧・南欧からの移民の非識字率の減少が他のエスニックグループと比べて少ない(1890年に13.1%だったものが1930年に10.8%)ということであろう。こうした数字からも新移民に対する教育が遅れていることと同時に「無知な Dinaric や Mediterranean (ユーゴスラヴィアや地中海など、新移民の「排出国」とされた地域の出身者に対する蔑称) が高尚なアメリカ文化を駄目にする」という、一種優生学的な意見の証拠としてこの数字が使われた可能性があるということである。

こうした「新移民」に対する冷ややかな「アメリカ人読者の目」は後述するが、ここで強調すべきなのは両大戦間期においては、およそ9割以上の人が文字の読み書きが出来、金銭的余裕があれば様々な事象をテーマに取り扱っている小説が掲載されている雑誌を読むことが可能だった、という点であろう。勿論、全ての文字の読み書きの出来る人間がここで取り上げる小説や雑誌を全て読んでいたわけではないであろうが、両大戦間期アメリカにおいては少な

Percentage of persons 14 years old and over who were illiterate (unable to read or write in any language), by race and nativity: 1870 to 1979

Year	Total	White			Black and other
		Total	Native	Foreign-born	
1870	20.0	11.5	—	—	79.9
1880	17.0	9.4	8.7	12.0	70.0
1890	13.3	7.7	6.2	13.1	56.8
1900	10.7	6.2	4.6	12.9	44.5
1910	7.7	5.0	3.0	12.7	30.5
1920	6.0	4.0	2.0	13.1	23.0
1930	4.3	3.0	1.6	10.8	16.4
1940	2.9	2.0	1.1	9.0	11.5
1947	2.7	1.8	—	—	11.0
1950	3.2	—	—	—	—
1952	2.5	1.8	—	—	10.2
1959	2.2	1.6	—	—	7.5
1969	1.0	0.7	—	—	3.6 ⁻
1979	0.6	0.4	—	—	1.6 ⁻

⁻ Based on black population only
 SOURCE: U.S. Department of Commerce, Bureau of the Census, Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970; and Current Population Reports, Series P-23, Ancestry and Language in the United States: November 1979. (This table was prepared in September 1992.)

表1：アメリカの識字率の変化⁵⁾

らぬ人々が「フロイト」という文字情報を短絡的に無意識や夢、性的衝動と結びつけ「全ての人間の行動はリビドーや無意識のような心理学用語で説明できる」といった心理学万能論を支持していたと考えても良いのではないだろうか。

(2) マーガレット・ミッチェル

マーガレット・ミッチェルはアメリカ大衆文学の巨人というだけでなく、本論を展開する契機となった重要な人物である。

1900年にジョージア州アトランタで生まれたミッチェルは、Washington Seminary というアトランタでも裕福な子女が通う私立女子高等学校を卒業した後、北東部のマサチューセッツ州にある、当時は全米の女子学生の中でも特に勉学の才能に秀でた学生が集まっていた Smith College に入学した。

まだ飛行機もない時代だったため、アトランタからマサチューセッツまでは鉄道で殆ど1日を電車の中で過ごさねばならなかった。彼女の代表作である『風と共に去りぬ』からも判るよ

うに、南部、及び Dixie としての誇りを持っていた彼女が、「異文化地域」と言っても良い北部のニューイングランドの大学に進学した理由は、一つは彼女の母親であるメイベルが保守的な南部白人の弁護士である夫であるユージーンに対抗するために、進歩的な考えを持っており北東部で盛んであった婦人参政権運動に関わっていたことがあり、自分を厳しく律していた母親を喜ばせるためであったと言われている⁶⁾。少女期を母親からの厳しい躰によって育てられていたミッチェルだが、『風と共に去りぬ』を出版し、大衆文学作家として名声を博してからミッチェルは自らの Smith College への入学（結局は北部同年齢の女性の気質に合わず退学に終わってしまったのだが）に関して「心理学を学ぶため」という一種の自己弁護をしている。一躍有名作家となったミッチェルは「アメリカ北東部の名門大学を出た後にヨーロッパに渡りウィーンの偉大な学者達（引用者注一明らかにフロイトやユングを意識したものだと考えられる）の元で精神医学や神経医学を修める予定だった」と手紙で述べている⁷⁾。パイロンの研究によれば、ミッチェルは20代及び30代の一介の新聞記者として生業を立てていた時期、趣味として神経医学の本を読み、心理学及び精神分析理論を自らの著作に活用するために多くの文献や論文を読んでいたために、彼女の友人は「彼女の部屋の書斎の棚の一区画全部が心理学の本で埋まっていた」と証言している⁸⁾。このような彼女の精神分析及び心理学に対する非常な熱意は、『風と共に去りぬ』で成功した後の彼女のしばしばの虚言癖と相俟って、彼女をして「ジグムント・フロイトと一緒に研究をするのが夢で、まずはアメリカの中の名門女子大であるスミス・カレッジに入学した」⁹⁾と言わしめたと考えても無理は無いであろう。

ミッチェルのこの手紙やミッチェルに関する研究を敷衍する限り、1920年代～1930年代の両大戦間期においては「フロイト」というアイコンの持つ巨大なイメージはアメリカのインテリゲンチヤが集まる北東部だけではなく、ミッチェルが20代～30代を過ごしたアメリカ南部（≡ニューイングランドに比べて保守的で文化的にも一部の特権階級を除き北東部に水をあげられていた地域）においても十分に通用する「流行の最先端を行く学者」であり、また、南部においても、専門研究者ではない一個人で、しかも女性であるミッチェルが容易にフロイトの著した精神医学に関する多くの本を蒐集でき、親しむことが可能だったということを示しているのではないだろうか。このことから当時のミッチェル以外の中等教育以上の学歴を持つアメリカ市民にとってもやはり、「フロイト」というイメージは我々が想像するよりも身近な存在だったのではないかと推測できよう。

(3) ユージーン・オニール他

フィッツジェラルドやミッチェルと同じく、ユージーン・オニールもフロイトの精神分析論を自らの著作に反映させた作家の一人として挙げられる、とジョージ・シルヴェスター・ヴィーレックは主張している¹⁰⁾。

ヴィーレックの1925年当時に *The Forum* で発表された論考の中にはオニール以前にもハー

ヴィー・オヒギンズ (Harvey O'Higgins) やルパート・ヒューズ (Rupert Hughes) などが「近年の作品ではフロイトの著作からの影響が顕著であることを認めている」¹¹⁾ と論じている。

オニールの作品についてはヴィーレックの 1925 年の論考の前年の 1924 年に発表された戯曲『楡の木陰の欲望 (*Desire under the Elms*)』でカリフォルニアのゴールドラッシュに沸いていた 19 世紀半ばを舞台にした作品で、北東部の農場主エフレイム・キャボットの後妻であるアビー・パトナムと性的関係に陥り、子供を作ってしまう先妻の子であるエベンとアビーとの間の葛藤は言うまでも無く、フロイトが「コンプレックス」の最たる典型として提唱したギリシャのエディプス神話をモチーフとしている。

物語の中では禁忌の関係を持ってしまったがために「自分の愛する人の子供を産めた」と喜ぶアビーに対し、エベンは「自分の子供として扱うことも出来ないなど言語道断だ。自分は西部に行って一旗挙げてやる」とアビーと子供を置いて西部に旅立ってしまう。自分が本当に愛している男性に置き去りにされたアビーは絶望の余り精神を病み、最終的には「この子さえ生まれてこなければよかった」とキャボットが可愛がっていた子供を殺してしまう。

ヴィクトリア朝文化の視点から考えれば不道徳極まりないこの戯曲は、1924 年にブロードウェイで 46 回公演され、人気を博した。勿論、オニールの卓越した文学性や人物描写に負うところも大きいですが、上演当時、こうした禁忌の性愛関係や、その性愛関係の縛れから生じる神経症（物語の中ではアビーが陥っている）といった寓意が「不道徳」ではなく、神経症に陥った故の振れた性愛関係が文学的な価値を持って聴衆に受け入れられるほど、神経症という疾病が「心理学万能論」を説く似非心理学者や似非医者（これらの存在については後述する）の喧伝によって人口に膾炙していたと考えるのが妥当ではないだろうか。

また、この作品はヴィーレックの論考が発表された後の作品になるが、1931 年に発表された戯曲である『喪服の似合うエレクトラ (*Mourning Becomes Electra*)』もフロイトのエディプス・コンプレックスを代表とする親子の禁忌の性愛関係の一つであるエレクトラ・コンプレックスを描いた作品である。オニールの作品は主にブロードウェイやオフ・ブロードウェイなどで上演されており、その意味ではすべての識字のある大衆に対して援用することは出来ないが、少なくとも、ブロードウェイで演劇を見るだけの娯楽に出費が出来るだけの金銭的余裕がある人々にとってはオニールのこうしたギリシャ古典劇、ひいてはフロイトの性愛的な禁忌の関係を描いた作品に関しては「奇異なもの」として眉を顰めるものではなく、ごくありふれた現代の病としての神経症の位置づけが観客の中にはしっかりと固定されていたのではないだろうか。

ヴィーレックは両大戦間期のアメリカ文学がフロイトの精神分析の影響をいかに多く受けているかを示すために、ジェイムズ・ブランチャ・キャベルの『ユルゲン (*Jurgen, A Comedy of Justice*)』(1919 年出版) の主人公で天国から地獄までを変幻自在に旅をするユルゲンの姿を「無意識の王国を旅する旅人である」と評しており¹²⁾、詩人であるエドガー・リー・マスター

ズの『スプーン・リバー・アンソロジー (Spoon River Anthology)』(1916年刊)やウィリアム・ベイヤード・ヘイルの『ウッドロー・ウィルソンの文体についての論考』(1920年刊)を「フロイトの精神分析学に影響を受けた著作もしくは文芸批評」として挙げている¹³⁾。ヴィーレックはフロイトの精神分析理論の影響について「異常者のみの分析に終始していれば学術的に批判を受けることが少なかったのではないかと述べ、それが殆どすべての人々に援用できるとした(おそらくフロイトではなくその追随者たちが明白な精神異常者だけでなく「異常でない」と通常精神医学では診断される人々にまで「拡大解釈」した)時点から議論や批判的ともなると同時に、その「拡大解釈」が文学や識字のある大衆に「わかりやすいフロイト像」を提供することにもなったと述べている¹⁴⁾。

ここで筆者が大衆を「識字のある大衆」に限定しているのは、「大衆」と「大衆を批判するエリート」という二分法で議論を終わらせることを出来る限り捨象するためである。両者の中間の存在として「識字のある大衆」を設定することによって「識字のない大衆よりは学校教育を受けて字は読めるが、エリートほど専門的な教育は受けていないために、両大戦間期当時のマスメディアのセンセーショナルな報道の受け皿として必要であった多くの人々」の存在を設定している。彼らが小説などの文学の文章を読む場合、専門的なテキスト解説というよりは、自らの娯楽のために、もしくは自己存在を肯定してくれる語りに出会うために読むというのが主な動機である。よって彼らの中での文学作品のテキスト消化作業は飽くまで自分に都合の良いものに変化しており、現実世界で自分が直面している問題からの逃避かもしくはその問題を深く考慮することなく安易に解決に結びつける作業かのどちらかに直結している。しかしながらこれはデマゴギーによってすぐさまヒステリックな反応を示す「大衆」とは、多分に問題がある方法とはいえ一度テキストを取り入れている点で性質が異なるのではないかと考える。このような「識字のある大衆」とってはフロイトが精緻化した用語である「リビドー」や「無意識」「超自我」といった言葉は深く掘り下げられることなく、自分の身近な出来事に結び付けて自己流に解釈をしてそれで満足をしている。ヴィーレックはこの現象を問題視して「文学の墮落」を嘆いたが、逆に考えれば、このような傾向は小説が識字のある大衆によって読まれる時に必ず起こり得る現象なのではないだろうか。

4. 大衆雑誌の中のフロイト及び精神分析像

前章に引き続き、本章では両大戦間期アメリカ大衆文化の中でどのように「フロイト」や「精神分析」が描かれていたかを、大衆雑誌の批評や論考からの文章及びイラストを参考にして辿っていく。前章で述べたとおり、アメリカ人の識字率は両大戦間期には非常に高まっており、多くの人々が字を読み、雑誌を読むことが可能であったことを考えると、何らかの形で非常に多数の人々が「フロイト」「精神分析」「心理学」「精神病」などの言葉に触れる機会が

あったと考えてよいのではないだろうか。本章では、そのような雑誌の記述から、書き手、及び読み手がどのようにこの「フロイト現象」を取り上げていたのかを敷衍していく。

(1) フロイト理論の「俗化」批判

著者が渉猟した兩大戦間期アメリカのおよそ読者が大衆向けと想定された雑誌の中では、フロイトの理論については、「フロイトが俗化されてしまった」「アメリカではフロイトが正しく理解されないまま大衆に広まってしまった」というような批判や危惧の論調の小論が多々見られている。しかしながら著者は「俗化してしまった」と評論において嘆く批評家の現象の中にこそ、フロイトの精神分析学の「大衆の中での姿」や前章でヴィーレックが指摘したような「大衆化されたことによって生じた両義性」が見出せるのではないかと考える。本節ではフロイト理論が大衆向けの雑誌においてどのように「説明」されているのかを見ていきたい。

a) フロイト理論の「簡素化」

精神病理学が専門の医学博士である G.V. ハミルトンは 1930 年の *The Forum*¹⁵⁾ 4 月号において、フロイトの提唱する精神分析理論について、視覚的に瞬時の理解がより容易であるイラスト（ジェオフリー・ノーマンが担当した）を含めて、簡素に説明を試みている¹⁶⁾。

この中で特に項を設けてハミルトンが説明しているのは「神経衰弱 (Neurasthenia)」「創造的衝動 (The Creative Urge)」「昇華 (Sublimations)」などである。

ここで図 1 を見ると、術衣を纏った外科医が病人と思しきベッドに寝かせられている人間に対し、治療行為を行っている様子がポジとして映し出され、それに対するネガ（影）として外科医が斧を持って多くの人体をバラバラにしている様子が描かれている。

このイラストに対し、ハミルトンは次のように説明を行っている。



図 1 「昇華」についての説明図

典型的な外科医は、他の人々と同じように自分の友である生き物（引用者注—人間を指す）を傷つけぶち壊してしまいたいという欲望を内に秘めている。しかし、彼はその直接的な欲望のはけ口が衝動に結びつき、明確な動機無しに残虐で無慈悲な殺人を犯してしまうような行為はしない。彼はその原始的な欲望を、人肉を切り刻むという反応に出る。しかし、最初に彼は注意深く麻酔（anaesthetics (sic.)) を用いることによって痛みのないプロセスを作り出す。つまり、彼は治療するためだけに切り刻むのだ¹⁷⁾。

ハミルトンの説明は「昇華」という精神分析学における専門的な用語を知らなくても、『昇華』という言葉が何を意味するのか」ということを伝達するには適切な方法で「人間の心理の深層」について説明をしているように見える。このハミルトンの論述自体は簡素化した説明として十分なものであるが、逆にこのように簡素化することによってある人間が意図的に犯したこと（主に犯罪行為）について「自分の深層心理（フロイトでいうところの無意識や超自我）が勝手に動いてやったことであり、自分の意識としてはそんな行為をするつもりはなかった」と弁明する余地を与えてしまうことを可能にしてしまった。実際、ハミルトンのこの論説の中の別のイラストにおいては「ショーケースに陳列されている刃物を見る婦人のポジがその刃物を掴んで犯罪行為をしようとしているネガ」が見られ、ハミルトンの「精神分析学を判り易く伝えたい」という本文の意思とは無関係に読者に「全ての行為は深層心理が深く関わっていて、自分の意識で説明できないものは全て深層心理で説明可能である」という誤った印象を与えかねない。このような危険性は後述するロバックやメニンガーが憂えた「心理学万能ブーム」となって両大戦間期のアメリカ大衆社会を席卷するのである。

b) A.A. ロバックの『似非学問としての心理学』

A.A. ロバック（Abraham Aaron Roback, 1890-1965）はポーランド系移民の出自を持ち、ハーヴァード大学やクラーク大学で研鑽を積んだ心理学者・言語学者・民俗学者であるが、彼が1929年5月号の *The Forum* に寄稿した“Quacks（偽医者）”という論考は、当時のアメリカにおいて、心理学が純粋に学問としてだけでなく、金儲けの道具に使われてしまっている



図2 Quacks（似非医者）

ことを悲観的に論じている¹⁸⁾。

ロバックはこの論考の中で「天文学は最も古代的な似非科学だ」「ルネッサンスの時代、錬金術は化学の先駆者ではないが、化学的な思考が始まった兆候として考えられる」と述べており、いつの時代においても科学の衣を纏った似非科学は存在すると主張している¹⁹⁾。

ロバックが20世紀初頭において「似非科学」として糾弾しているものこそが精神分析であり、フロイトが自らの議論が素人の間に広まった時に「似非知識人」がこれを格好の金儲けの材料にするであろうと予見していたと述べ²⁰⁾、フロイトと精神分析が現れたことによって、それまで教育の分野で否定されてきたものが尊敬の眼差しを向けられるようになったと悲観的な事例を挙げている。ロバックは「精神分析、及びフロイトが素人に受け入れられた時に作られてしまった誤った科学言説」として「抑圧」や「リビドー」、「転移 (transference)」といった学術的な用語が雑誌には散りばめられており、これらの精神分析に限定して使われるべき用語が「似非医者 (quack)」の金儲けの種になっていると論じただけで、「潜在意識の活用の方法」や「セールスマンが(顧客の[一引用者注])潜在意識に対して(商品を[一引用者注])魅力的に訴える方法」といったような、現在でいうところの「ビジネスハウツーもの」とされる書籍や記事が何十冊も刊行され何百もの記事にされることで一般の読者の耳目を引くものになっている。このような当時の状況に対してロバックは「フロイトの悲観主義はここにあまりに顕著に現れてしまった」と嘆いている。

ここでロバックが本論考を発表した時期について振り返ってみたいが、1929年5月（おそらくは執筆時期は1929年4月頃と推測される）は世界大恐慌として知られる1929年10月24日の直前であり、第一次世界大戦で戦場とならなかったことから順調な経済発展を見せ、好景気に沸いていたアメリカが1924年頃から投機熱（いわゆるバブル景気）に変質し、実態を伴わないマネーゲームが繰り広げられていた最終段階の時期と考えることが出来る。街頭の靴磨きの少年すら投資の話をするようになっていた当時のアメリカ合衆国において、何らかの手段を持って金儲けや資金運用をすることは当然視されるようになったのは2008年の世界金融危機を経験した我々にとっても全く門外漢の話ではない。実際、1980年代のバブル景気の時代において、日本は不動産投機や新新宗教（オウム真理教や幸福の科学など）の加熱ぶりは記憶に新しい。ここで筆者が注目したいのはこうしたバブル経済期において、余剰の資金を「聖なる目的のために捧げる」信者を持つ新新宗教が巨大化したことであり、正に1929年の株価大暴落の時期寸前のアメリカ合衆国でも同様の現象が起っていたことをロバックが指摘している点である。

ロバックは「それまで催眠術や官能的魅力、ヨガ神秘主義、新思想、骨相学、オカルト主義などに依拠していた似非医者たちがいっせいに心理学を金儲けのために『改変』し始めた」と述べており、これらの神秘思想系に関係する人々が自分達の目的にもっとも適合するものとして「公認された科学」としての心理学を利用する傾向を指している。

ロバックはこうした似非医者達が自らの利潤を獲得するために利用する心理学用語には「秘密の力」「隠れた力」「不老の知恵」「遠隔透視 (telesthenia)」「星気の色」などの神秘主義的、及び神智学的思想と結び付けて患者（＝顧客）から診療報酬を得ようとしていると、心理学の用語が「低俗な金儲けのために転化して似非医者によって使われ、また、メディアがその活字化された権威を持って『最新の学問の成果』とプロパガンダを流してその効用を煽り立てている状況」を嘆いている。

また、ロバックはメディアや従前から存在する似非医者が心理学を「科学言説」として自らの金儲けのために使用する状況だけでなく、アマチュア達が心理学を好んでいたことも指摘している。これは筆者がマーガレット・ミッチェルの事例を挙げて論じた際にも顕著な事実として現れたが、ロバックはこうした「心理学好き」のアマチュア達が様々な会合を開いて活動をしていることも問題視している。例えば「応用心理学クラブ (Applied Psychology Clubs)」という名がつけられたクラブ組織において「100年生きるためには」や「100万ドルを稼ぐためには」「脳を発達させるには」などの話題で女性のクラブ会員が実際に講演を行っていた事実を指摘している²¹⁾。また、この女性に対抗する存在としてフロリダの「実践的な心理学の実現のシステム」を売りつけた女性判事の例や「自立的な科学の創設者であるロサンゼルス出身の奇跡の女性」の例なども挙げており、心理学に関して「判りやすく解説した」大衆書籍（ロバックは自分自身を「多くの思想や研究の精査によって科学者として存在している」と定義し、これらの「似非医者」と自分のような「研究者＝科学者」とは全く違うものであると主張している）を読んで、自分が権威ある科学者であるかのように振舞う人々や思想、また、両大戦間期当時において最も訴求力が高かった新聞・雑誌等の活字メディアで如何にこれらの言説をセンセーショナルに取り上げて金銭的な成功を収めるかが多くの人々にとって関心を集めていたという。ロバックは、この「心理学言説現象」について、当時の「有名心理学者」による著作の表題を見ればどのようなものか判ると、次のように述べている。

『七人の美しいマニキュア師が見る結婚した男性』『心理学的なサム』『愛についての心理学的な事実』『女性は愛することができるのか？』（中略）『あなたは150歳まで生きることができる』『あなたは株式市場でくじってはいまいか？』『あなたの心の財産を凍結してはいけない』（中略）しばしばこのような書物にはよく知られた心理学者の研究からの抄録が、まるでその著名な心理学者たちがお金をもらってこれを書いているといったような出版のされ方をしている。（中略）このようなえせ哲学的な雑誌は本当の心理学者たちからのとっておきの面白い話を提供してくれているかのようだ²²⁾。

ロバックがここで問題視するのはこうした「大衆心理学書籍」の中の「有名心理学者」が自説を尤もらしく裏づけするものとしてウィリアム・ジェイムズなどの心理学研究者が記した書

物から自説に都合の良い部分だけを引用しているという当時の現状だった。本職の心理学者の言葉を引用すれば、自らの著作の権威も上がると「有名心理学著作者」が考えたと同時に、それ集る出版業界も架空の大学出版会を作って「有名心理学著作者」から原稿を募ってこれらの似非学者達の矜持を保たせようとすると同時に「大学の出版会が出している本だから確かな研究に裏づけされているものだ」と読み手の側に一種の「安心感」と「尤もらしさ」を与えていたことを糾弾している²³⁾。

また、ロバックはアメリカに特に顕著であった Lyceum 運動が「有名心理学者」に期せずして利点を与えていたことを指摘している。ロバックが問題として挙げた「応用心理学クラブ」は何度も Lyceum 運動で使われた講演会場を使用して自らのプロパガンダを説教し、聴衆たちはクラブの“lesson”を聴くだけで自分が心理学について何らかの重要な点を知ったような気持ちになり、更にはこのような「心理学的な会合」は歌を合唱することによって周囲の観衆や説教者との一体感を得て満足していく。この手法は既に「科学」の枠を超えた「宗教運動」の色を濃く帯びており、ビリー・グラハムのキリスト教福音派 (Evangelical) の説教の方法と集客の手法を彷彿とさせるものである。

ロバックは自らを飽くまでも「科学者」「研究者」として位置づけており、これらの似非医者 (ロバックは1929年の本論考出版時に週刊誌や月刊誌の広告から少なくとも似非医師がアメリカには15,000人はいると推定している) や、現代的に表現するとディプロマ・ミル大学出版社の次々に出版される「判り易い心理学」に関する出版物と自らの研究とは全く違うものであり、心理学研究者としての大学人は決してこうした「似非医者」や「大衆出版」と関わってはいけないと論じている²⁴⁾。

しかしここで筆者が注目したいのは、ロバックのようなエリートの学術専門家が *The Forum* のような専門誌以外の大衆雑誌において「似非医者には気をつけなさい」と警鐘を鳴らさなければならないまでに、大衆の「心理学万能論」に対する興味や誤解が広がっており、一種の流行思想 (epidemic) となってアメリカ全体を覆っていたのではないかと思われる点である。また、当時としてはこの流行を支えていたのは男性だけでなく、女性の講釈師や似非医者も多く含まれていた、という点も特徴的であると言える。

c) カール・メニンガーの目から見た「フロイト現象」

カール・メニンガー (Karl Menninger, 1893-1990) はハーバード・メディカルスクールを優等で卒業した後、1919年に精神科医としてメニンガー・クリニックをカンザス州トピカに設立し、精神医学の専門家として理論研究だけでなく臨床研究をも行った人物である。

そのメニンガーが保守系の大衆雑誌である *Outlook and Independent* の1930年7月9日付で寄稿した論考には“Pseudoanalysis” (似非分析) と題名がつけられており、前項でロバックが問題視した「素人心理学者と心理学専門家との間の軌轢」について採り上げている²⁵⁾。

メニンガーはこの軋轢の原因を、フロイトが理論の中で使用したリビドーや神経症、無意識といった専門用語が余りにも早く人気を得てしまったためと位置づけており、また、フロイト自身のこのアメリカの両大戦間期におけるフロイト・ブームや精神分析熱について「親しみも持っていないし支持者の間に自分の理論に対する深い理解も見受けられない」と語っているとメニンガーは記している²⁶⁾。

そうした冷ややかなフロイト自身のアメリカの精神分析熱に対する批判を受けて、メニンガーは「精神分析の一番の敵はそれを誤解した友人（ロバックの言葉を借りれば似非医者——引用者注）である」と述べている。メニンガーは最も問題にすべき存在は心理学を学び始めた学生ではなく、「精神分析の原理を十分によく応用できている」と自らを誤解して日常の会話でその「見掛け倒しの科学」を作り上げ、元々あった精神分析を過度に簡素化し、吹聴することによって誤解を招いているアマチュア達であり、彼らの行っているものは「精神分析（psychoanalysis）ではなく似非分析（pseudoanalysis）である」と断罪している。

そのような似非分析に至ってしまう問題点としてメニンガーが挙げている特徴としては「精神分析の語彙の日常の会話への用いられやすさ」があり、精神分析の手法を援用して書かれた小説は「我々の世代を象徴する言葉を豊富に含んでいる」ために大衆に受け入れられやすいからだと分析している。

こうして大衆の口の端に上るようになったフロイト起源の精神分析の用語の氾濫は、フロイト自身どころか、精神分析や心理学の専門家がその誤解や誤用をどれだけ訴えかけたとしても、一種の流行となってしまっているために、逆らうことが出来ない。

メニンガーが「最もよく精神分析の用語が口々に話されている場所」として挙げているものが、パーラー（parlor—図3からも判るように、parlorはアメリカにおいて両大戦間期当時は現在の喫茶店のような役割を果たしていた）だった。メニンガーが注視しているのはパーラーで交わされている次のような現象である。

皮肉にも面白いことではあるが、こうした『科学的用語』を最もよく操っている人々はフロイトの作品など読んだことがないか、それともちらっとだけ知っている程度で、彼の言語や観念をあまりに見事に間違った方法で解釈しているのだ²⁷⁾。

精神分析学による処置を行使するには何年もの勉強が必要であり、その多くは医学博士号が必要だと考えられている。このような通常の専門的な分析は3か月から1年以上を要する。それなのに、パーラーで2、3分しゃべっただけで精神分析理論が出来ると豪語する人間に自分の精神の診断を依頼することはできるだろうか？²⁸⁾

興味深いことに、メニンガーのこの論考に添えられた図3のようなイラストは両大戦間期当



図3 パーラーで「精神分析」に興じる男女

時のアメリカにおいて「精神分析」という言葉そのものを象徴しているかのようである。この図からは、女性とは所謂「流行の最先端」を行くフラッパー（flapper）の格好そのものをしており、また、それまでのヴィクトリア朝文化において女性にとって不謹慎とされていた喫煙行為を堂々としている。一方で、男性は典型的なジャズ・エイジの「お洒落な白人男性」として描かれており、まるでこの図だけ見ていると、前章で挙げた E. スコット・フィッツジェラルドの小説の中の挿絵のようにも取れる。

メニンガーは素人がフロイトを読む時に犯しがちな間違いとして「何でもかんでも性的なことに結びつけることである」と述べている²⁹⁾。確かに図3やフィッツジェラルドの小説は両大戦間期当時の厳格なヴィクトリア朝文化からも開放され、また、“New Woman”の象徴ともなった婦人参政権運動を主な目標としたフェミニズム運動も1920年の憲法修正により達成されたことによりひと段落し、大量消費文化の隆盛の下、よりセンセーショナルな性的刺激を求める若者たちが増加し、そのような flapper や male flapper 達が自分のアイデンティティを親世代と差異化するために飛び付いたのが「フロイト」という言葉（決して彼の学術的な理論を指す訳ではなく、「性衝動」や「無意識の診断」といったイメージのみが付加されている状態）であり、精神分析（親世代の土台を崩すための自らの拠り所）だったと考えるのが妥当だろう。

そうした「断片的で間違った精神分析の用語」が両大戦間期アメリカの都会のパーラーで主に若者たちの間で飛び交っているのがごく普通の光景であった、とメニンガーの論考及び図からは推測できるのではないだろうか。

(2) トマス・ラカーの分析

前節においてはロバックやメニンガーなど、同時代の学術的な専門家からの両大戦間期における「フロイト・ブーム」を捉えたものであった。本節においては、フロイト本人ですら眉を顰めてそのブームを問題視したことに関して、20世紀末においては心理学言説を取り扱う研

究者たちがどのように当時の「フロイト・ブーム」を捉えていたかを、主にトマス・ラカーの論説に絞って言及していく。

カリフォルニア大学バークリー校において歴史学の教鞭を執っているトマス・ラカーは1990年の著作である *Making SEX: Body and Gender from the Greeks to Freud* (邦題:『セックスの発明 性差の観念史と解剖学のアポリア』[高井宏子・細谷等訳 1998年, 工作舎])の中で古代ギリシャから続いた女性及びセックスの表象の歴史を敷衍した際に、フロイトを「セックス・モデルの物語を作り上げた最後の人物」として最後の章で触れている。

本書においては男性と女性の性差について、古代ギリシャ時代から「女性性器は男性性器を体内に向けてひっくり返したものである」という「ワン・セックス・モデル」が18世紀以前までは広く認知されていた。

この「ワン・セックス・モデル」が大きく転換を遂げるのは18世紀後半の解剖学によってであり、「科学の言語を通して、近代人の意識の中に身体は取り込まれていく」と述べ、科学の発達で「ワン・セックス・モデル」から「ツー・セックス・モデル」へと変貌し、まさに科学が拠り所となって性別役割モデルの物語が作られ、また、科学の側もその物語のコンテキストに見合った研究成果が重視されるようになった³⁰⁾。ラカーは自著の中で科学技術そのものがいかに精緻化され、また科学的知識が正確に把握されるようになって、その科学を「利用」し「使用」する人や社会・時代背景の影響からまったく独立して成立しているとは考えておらず、「科学の名の下に綴られる『詩』を抑えることはできない」³¹⁾と、性差や性欲に関する18世紀末～19世紀にかけての社会的ディスコースが「ツー・セックス・モデル」を支持してきたと述べている。

この「ツー・セックス・モデル」を最終的に「クリトリスからヴァギナへの性感帯の移動」として支持した人物としてラカーが挙げているのがフロイトであり、彼の『性欲論三篇』であると説いている。ラカーは実際のところは解剖学的・生物学的にフロイトが掲げたような「性感帯の移動」は純粹に社会的コンテキストを除去した形での科学的論点から全くは根拠が無く、フロイトはおそらくそのことを認識していたと論じている³²⁾。ラカーはフロイトがいかに当時の「常識」として認識されていた「ツー・セックス・モデル」を自説に取り入れていったかという点について次のように述べている。

女性セクシュアリティの謎に対するフロイトの答えは、解剖学の装いを凝らした文化的な物語として解釈されねばならないだろう。つまりクリトリスをめぐる議論は文化の寓意であり、いかに身体が強制的に文化に有用な形態へと捏造されていくかを物語っているのだ。生物学的な学術用語は寓意を権威づけるレトリックとして機能するだけで、神経や身体の深層にある現実を記述することはない³³⁾。

ラカーはフロイトの語る「科学」は社会的な支持を得た「物語」であり、そこには常に筆者が前節で述べたような「誤用」や「簡素化」、より露骨に表現することが許されるのであれば「非専門家である大衆の玩具」になる余地が残されていたが故に、前節で述べたような似非医者や大量出版によるフロイト・ブームが巻き起こったのではないだろうか。ラカーは更にこうも述べている。

多形性倒錯ははるか昔には普遍的なセックスであり、その名残は今日でも幼児や動物に広く見られる。しかし、種の存続と文明の発展のために、女性は社会に適合するセクシュアリティを帯びなければならない。女性が性感帯をクリトリスからヴァギナへ移動させるのは、指定された女性としての社会的役割を受け入れるためにほかならないのだ。(中略)フロイトは19世紀の生物学主義の申し子として、二つのセックスが異質な器官と生理機能からなることを前提としていたし、また進化論の強い影響のもと、生殖器官の機能が異性愛性交に適応していくプロセスを理論化していった。つまるところ、ヴァギナ性愛という文化的神話は科学のレトリックで語られるのだ³⁴⁾。

ここで、このような「心理学に関する文化的神話」が何故両大戦間期のアメリカで一大ブームを引き起こしたかということについて述べておきたいが、第一の理由としてこの時期に基軸通貨がイギリス・ポンドからアメリカ・ドルに転換し、名実共に世界経済の中心地となったことでアメリカに多くの資金と情報がもたらされたことが挙げられる。大量の資金によって有用な情報も多く入ってくると同時に、雑多で分類不可能な情報をも流通する余地を作る。アメリカの戦後景気と1920年代全般にわたる好景気によって先進技術が生み出されたのと同時に、豊かな人々の余剰生産物である資本をどうにかして搾取しようとする「似非医者」「似非科学者」や「応用心理学クラブ」などが発生する土壌を担っていたとも言えるだろう。

第二の理由として、第一次世界大戦の戦禍を免れたアメリカは自らを「世界のリーダー」と位置づけると共に、リーダーが背負うべき品格や文明的に先進的な思考を持つべき姿勢が暗黙のうちに要求されたことが挙げられる。両大戦間期当時、フロイトというアイコンや心理学のイメージはその意味で歴史こそ浅かったが最も先進的で知的刺激に溢れた学問分野であり、その意味でも「新しい学問を積極的に開拓する、先進的な国家アメリカ」という理想の自画像を十分に満たすだけのものではあった。

第三の理由として、フロイトがギリシャ神話のエディプスを準えた「エディプス・コンプレックス」などの寓意と物語性、及び——多くは「似非知識人」や「似非医者」による吹聴であろうが——「判りやすさ」が、この時期に識字率が飛躍的な伸びを見せたアメリカの人々の興味を集めやすかったということもあろう。

こうした「似非科学」は科学的には否定されうるものであろうが、現在においても星占いや

Psychic（霊媒）による人生相談のテレビ番組がアメリカで放映されており、一定の人気を保っていることを考えると、科学的に証明できないからと言ってこうした科学言説自体を否定することは、科学言説を取り巻く社会的文化的コンテクスト、ひいては人間の行動そのものを否定することにも繋がりがねないし、逆にそうした「科学的に真ではないから否定する」という態度が何故形成されてきたかという研究材料をも我々に提供してくれるものではないだろうか。

5. 心理学の大衆化に対する同時代的批判

本章では、前章で述べたような、心理学の大衆化や似非医者や似非分析家の横行に対して同時代のアメリカ人達はどのような批判的な視線を送っていたのかを俯瞰していく。

(1) 『ロウブラウにとっての心理学』

本節の表題は20世紀初頭から中期にかけてアメリカで心理学・少年犯罪学の専門家として知られているエレアノア・ロウランド・ウェンブリッジ（1882-1944）が *The Survey* の1928年4月15日号に寄稿した論考のタイトルをそのまま援用したものであるが、これは彼女が1926年から1935年にかけてクリーブランド州カイヤホガ郡の少年院に少女の非行にかんする審判員として勤務している最中に執筆されたものである。

ウェンブリッジはラドクリフ・カレッジで1905年に心理学博士号を取得した後、第一次世界大戦が勃発するまではアメリカ各地の大学で心理学の教鞭を執っていた。第一次世界大戦においてはニューヨーク赤十字病院で心理学の臨床医師として活動した後、1922年にクリーブランドで臨床医師としてクリニックを開業し、女性保護協会の心理学者として少年院の審判を勤めることになった。このような背景から、ウェンブリッジは研究者としてだけでなく、臨床家として実際に非行を行った少女達と向き合う機会に多く恵まれていたことが推測できるだろう。

表題がつけられた記事の一部でウェンブリッジは“Nadine and her Nerves（ナディーンとその神経）”という当時の新聞に掲載された風刺漫画を引用して「朝目覚まし時計がどれだけ鳴っても起きられないのに母親が『レジーが貴女を最新型のパッカードに乗せてオフィスに連れて行こうと電話があったわよ』と言った途端にベッドから跳ね起きるナディーン」や「近くを歩いていた女性の帽子が気に入ったので早速まるでレディ気取りで静々と帽子屋に入って物を買うなり『つけといて（Just Charge It!）』と店員に言いつけるナディーン」、「笑って手紙を書いていたと思ったら別の人宛の手紙で途端に不機嫌になり、二通の手紙をポストに入れた筈が一通しか入れておらず、『一体どっちを忘れたんだろうね?』とキューピーに笑われるナディーン」などの表象を通じて「これらの漫画には全くユーモアが欠けているが、これが億万長者の手で流通し、それに百万長者の心理学者が『科学的分析』を付け加えるだけでバカ売れ



図4 ロウブラウのカップルの典型的レムとレナ

してしまう漫画になってしまうのだ」³⁵⁾と断罪し、実際に神経症の少女達を患者として診断してきたウェンブリッジは「わかりやすい心理学」について冷淡な視線を送っている³⁶⁾。

ウェンブリッジは専門家であるが故に「心理学を大衆にわかりやすくすること」に付随して起きる「誤解」や筆者が前章で述べた「簡素化」について「心理学者が幾ら自分たちのやっていることを判りやすくしたところで、それを聴いているのは挿絵やスラングや簡単な単語に修正しなければ理解できないロウブラウ達だけである」³⁷⁾と危惧している。

では、ウェンブリッジが危惧した「心理学の変容」とはどのようなものだったのか。ここで、彼女はレム (Lem) とレナ (Lena) という一組のカップルを「ロウブラウの典型」として登場させている。

夫であるレムのキャラクター設定は「採め事が起こったときに通訳がしばしば必要となるポーランド人労働者を雇っている製鋼所で働いている」とされており、彼は職場でポーランド人労働者がまるでものが話せず耳も聞こえないように振舞い、また彼の上司も彼らを「自分の言葉が通じない奴ら」と決め付けて顎や親指でしか指示を出さないことを不思議に思っている³⁸⁾。図4でレムが読んでいる本の中には実際には「科学的な事実は経験則でもって解釈してはならない」と書いてあるものを「経験則 (rule of thumb)」という常用句を知らないがために、「彼らは親指で会話している」と誤解してしまっている。ここで筆者が第三章の表1で挙げた識字率の推移が「レムの上司の行動の理由」の一つの手がかりとなっている。この記事が書かれたのは1927年であるが、1920年に「外国生まれの白人」の非識字率が13%であった

が、1930年になっても他のエスニックグループの非識字率が激減しているのに比べて10%と3ポイントしか低下していない。そして、この表で「外国生まれの白人」として批判の槍玉に挙げられているのは東欧及び南欧からの移民であり、その多くが東欧ではポーランド系、南欧ではイタリア系移民とされ、彼らは「優秀なアングロ＝サクソン国家であるアメリカにどんどんと流入することによって文明を低下させる原因」としてしばしば差別的に扱われている。

ウェンブリッジが作り上げたレムの職場の場合もまさにその典型に当て嵌まるものであり、上司は「彼らには何を言っても通じないから働かせるだけ働かせて低賃金で雇用してやろう」と目論んでいることをレムは臍氣ながらに感じているが、「無知なレナ」は「本当に彼らは何も話せないのかもよ」となだめるように言っている。

更に図4（イラストはJ.H. ドナヒーによるもの）に描かれたような「レムとレナの心の中の奇妙なごた混ぜ状態」についてウェンブリッジは次のように述べている。

レムとレナは結婚したばかりで、本を読んでいる合間に赤ん坊にコーヒーとホットドッグを食べさせようとしている。本は最近よく書かれた文章からランダムに抜き出したものであり、多くの人々が熱狂的に支持しているものである。（中略）問題1「心理学の要素とは何だろうか？」（中略）しかしレナの方は「要素（elements）」という言葉で、ヒロインが戦い、ヒーローがジャングルの中で活躍する映画の中でしか聞いたことがなく、「要素」とは雷や稲妻だと思い込んでいる。（中略）レナは「これは雨についての本なの？」と尋ねるが、レムは「さあね。『レイン』という名前の劇があると聞いたことがあるよ」と返答し、それに対して「じゃあこれは心理学的な劇なのね」と決め付けている³⁹⁾。

このような誤解がレムとレナの間で延々と続けられた結果、本そのものは正しい心理学の基礎知識について記述された入門書であるにも関わらず、専門用語や慣用句に関する知識の欠如のためにとんでもないでたらめな「理論」が彼らの中で形成されてしまうことになる、とウェンブリッジは警鐘を鳴らしている。

そして最後に彼らの一番の関心事である彼ら自身の家庭のごたごたをも、全くでたらめなこじつけによって「心理学が解決してくれるだろう」と結論付けてしまう。図4の左端で泣き喚いているのは彼らの従妹であるハティであり、この赤ん坊の世話に二人ともくたくたになってしまっている（その証拠に、部屋は癪癪を起こしたハティが散らかしたゴミが散乱している）。本来であれば「我々が事実を見出した後に、それらの関係を支配している法則を見つけなければいけない」という文章がレムの「ロウブラウな」解釈にかかれれば「自分たちの今の事実を見た後に、自分たちの関係を何とか解決してくれる法則があるだろう」となり「僕が思うに、ハティのことを何とかしてくれる方法を教えてくれる心理学者がいるみたいだよ」と変えられてしまうのである。

一方のレナの方の「誤解」も凄まじく、科学者というのはキリスト教科学の司教（Christian Scientist）のことだと信じて疑っていない。本の中の「数的根拠」という言葉に対してもレナは「数学で何故人がより幸せになるのかが判らないわ」と言い切り、幸せになった理由はキリスト教科学を信じるようになったためであり、「心理学というのは一つの（キリスト教—引用者注）科学であって、ゴスペルではないのね」と言い、彼女が日曜教会に礼拝した際に聞いた噂である「心理学は危険で人心を乱すものであって教会を破滅させようする悪魔の道具の一つである」というアドヴェンティスト派の説教を思い出すのである⁴⁰⁾。

このような専門知識が全く無いレムとレナのような人間が心理学の本を読んでいる理由について、ウェンブリッジは「科学的テキストの抽象的な概念や論理的な帰結から逃れるために、具体的なものとや、自分たちが好んで読んでいる気持ちのよい支離滅裂さに救いを見出すのは、（中略）子供がマザーグースの不条理な物語を好むようなものだ⁴¹⁾」と述べている。このような「心理学を具体化し、的外れなものにし、おかしなものにしている」状況が、レムやレナのようなロウブラウ達によって作り出されており、一見したところ、多くの本や記事が出版・発表されることによって多くの人が心理学を理解しているように思われるが、実際はとんでもない誤解がロウブラウの間に生じていて、心理学の理論が捻じ曲げられてしまっているのだと問題視している。

ウェンブリッジの喩え話は、確かに誇張されている箇所も見られるが、両大戦間期当時、知識人層が自らを「ハイブラウ」「高級文化人」と定義し、大量生産によって生み出された大衆向けの芸術を「ロウブラウ」「低俗文化」と明らかに卑下して両者を「全く違うもの」「ハイなものはロウブラウには到底理解できないもの」として明確に分割された時代背景をよく反映している。ローレンス・W・レヴィーンは著書『ハイブラウ／ロウブラウ アメリカにおける文化ヒエラルキーの出現』において、19世紀まではアメリカでは地方に住む農民が巡回劇団によるシェイクスピア劇を自由に楽しむ余地があったところに、大量生産・大量消費の時代がやってきたことによって、レヴィーンが名付けるところの「共有文化」が散逸し、ハイブラウとロウブラウという文化ヒエラルキーが顕著になったと論じているが⁴²⁾、ウェンブリッジのこの論考はハイブラウに属する人々のロウブラウの無理解や無知に対する冷ややかな視線の証左そのものと言えるのではないだろうか。

(2) 専門家による「俗化」批判 ～マーサ・グアンジー・コルビーの事例～

マーサ・グアンジー・コルビー（Martha Guernsey Colby, 1899-1952）は僅か15歳でユタ大学に入学し、23歳でミシガン大学の博士号を取得した心理学者であるが、主な研究分野は子供の発達、特に音楽発達療法や現代ではギフトと称される特別に優れた能力を持った子供に対する社会からのアプローチの方法についてであった。

コルビーはミシガン大学で教鞭を執っている1928年6月3日号の *The Outlook* 誌において

「心理学を研究対象として進めていく時に起こりうる一般社会からの誤解や無理解」について次のように述べている。

昨年夏、サンディエゴでの大学業務関連の会合において「心理学を大学で教えています」と答えたところ、私は次のような質問で集中砲火を浴びた。「私の気質を分析できますか?」「私の『頭相 (bumps)』を読んでくれませんか?」「魂を保証することができますか?」「催眠術を披露してくれませんか?」「霊媒師を推薦いただけませんか?」これらの質問は骨の髄まで染み込んだ無知に起因するものである。彼らは高校や大学で心理学について研究してきたにも関わらず、大衆誌の記事や広告や心霊現象の啓蒙の小さな渦などにごたまぜに接してきたために、こんな見出しに集まってしまうのだ。『心理学と生きる方法』について。全六課。価格 50 ドル。教えるのは名声高い心理学者であり、学位を持つ某氏⁴³⁾

コルビーは大学関連の会合ですらこのような質問責めに遭う問題だけでなく、ロサンゼルスブロードウェイを歩いていたときに『心理学と霊媒——厳密に科学的なもの』と書かれた看板を見て辟易した感情に陥っている。そうした神秘主義を「科学」として標榜する霊媒やペテン師が、不安を抱えた人々を「精神分析する」ことによって利潤を得ていることに対しても眉を顰めており、アメリカ各地を研究のために訪れる中で「カリフォルニアはこのようなペテン師の教団が氾濫しており、その真であるのか偽であるのか判らない力でもって馬鹿馬鹿しい概要のハンドブックを生み出し、人々の人生において長期間惑わせるであろう『アドヴァイス』を与えているのである」と指摘している。こうしたペテンや日本で言うイタコの口寄せなどを行う霊媒師たちが自分たちのことを「心理学者」とであると称していることに怒りを隠せない語調で糾弾している⁴⁴⁾。

また、こうした霊媒師の詐称と同様に「性格分析」や「特徴分析」も大衆から資金を搾り取っていると指摘している。こうした霊媒師や分析家が稼いでいる金額はデトロイトとクリーブランドでの「霊媒」講義だけで 75,000 ドルにも及んだことを挙げ、翻って「(自分たちのような—引用者注) 正統派の心理学者は正直すぎて自分のところに診察に来る『騙してもらいたがっている』人々を騙すことができない」と自嘲染みた独白も残している。実際に心理学を専攻し、博士号を得て心理学を大学で教えているコルビーから見れば「大衆は事実よりもおだてのためにより多くの金を払う習慣を打ち立ててしまった」と、大衆の中にペテン師や似非医者などが入る余地を自ら作ってしまったことを示唆している。このような「似非心理学」が大衆に広まってしまったことに対して、「真の科学者」を自負するコルビーは、こうした似非心理学者が大衆に媚を売って金を儲けている対象である「感情」や「意志」について、物理学や化学といった実験科学の手法を使いつつ、哲学や経済学といった思想科学の手法も織り交ぜな

がら飽くまでも「より客観的に判断できる材料を開発し提供するに尽くしていく」のが自らの本分であり、催眠に関しても「催眠が医学的に制御された条件下に限定して合理的に取り扱われるものである」と催眠術師や霊媒師の「心理判断」と自分たち科学者が行っている学術研究行為とは全く異なるものだと言線を描いている。それにも拘らず、大衆の心理学を好奇の目や奇異な目で捉える態度は改善しておらず、「ある暗愚な司教は心理学者全員が無神論者か降霊術者のどちらかに分類され、再びこれらの心理学者に『不公正なでたらめ』という烙印を押していると最近聞いた」と引用して「心理学」という言葉が巷に溢れていることを問題視している⁴⁵⁾。

それに対する解決策としてコルビーが提唱しているのは「科学的根拠を伴い、実験科学や思想科学の流れの中で発展してきた科学分野としての心理学」と「金儲けのために霊媒師や降霊術者が行っていることの根拠を示すもの」との二つを厳然と分けて、「騙されたい人やおだてられたい人やそれをダシに金を稼ぐ人はそのまま放置しておいて構わない。真の心理学がすべての人に対してその存在が科学的に正当なものと判ればそれで良いのだ」と語気を強めて論じている。

コルビーのような態度は前節で触れたような「ハイブラウ」の「ロウブラウに対する冷やかな態度」を典型的に示したものであり、また、前章では「何とかしてこの似非心理学を追放して、正しい知識を大衆に広めねばならない」としていたロバックやハミルトン、メニンガーの積極性すら放棄した諦念を表象していると言える。

こうした消極的な主張は、4章1節b項で筆者が指摘したように、既に専門家が幾ら警鐘を鳴らしたとしても既に両大戦間期アメリカでの「心理学万能ブーム」はその歯止めが利かない状態に膨れ上がっており、心理学という言葉にかこつけて様々なペテンや神秘主義思想、新宗教思想などの思惑が複雑に絡んでいたためにこう表現せざるを得なかったと考えるのが妥当なのではないだろうか。

(3) 「弟子」たちによるフロイト理論の悪用説

本節においては、フロイトが唱えた精神分析について、その変容をもたらしたのはフロイトの理論の中に「誤読するだけの余地があった」とするのではなく、「フロイトの理論を面白半分に応用してしまった『弟子たち』」に主に咎が科せられると主張した論考を取り上げる。

a) ジャズ・エイジの寵児としてのマックスウェル・ボーデンハイムの精神分析批判

マックスウェル・ボーデンハイム (Maxwell Bodenheim, 1892-1954) はジャズ・エイジを代表する詩人であり、小説家であるが、彼が *The Nation* 第114号 (1927年) に寄稿した「精神分析とアメリカのフィクション」と題された論考によれば、「精神分析は現実主義時代の搾取された子供である」と位置づけた上で「この国では精神分析は批評家や創作者たちが自分たち

の感覚的な賞賛に対する図式化された言い訳として熱望されており、これらの人々はもちろんそれに男根的な誇張を以てでかでかと扱っているのだ」と現在の問題を「精神分析そのものやフロイトその人」にではなく「それを自分の都合の良いように解釈した人々」に原因を求めている⁴⁶⁾。

ボーデンハイムはフロイト自身に関しては「謙虚である」と評価し、「その弟子達こそ『性が全ての人間の動機を支配し、そのもととなり、全ての創作の礎となっているものだ』と捻じ曲げてしまった」と、哲学であれ芸術であれ、全ての創作が性的動機のもとで作られているとの誤解に至ってしまったのだと嘆いている。ボーデンハイムが「元々の精神分析」として描いているものは「ヴィクトリア朝文化の過度に性的事象を排斥する傾向に対する少しばかりの反抗」だったものであり、それが今や荒々しく反逆を始めてしまったのだと述べている。また、フロイト起源である「原初的な本能」「潜在的な欲求不満」「性的暗示」といった言葉を精神分析家達は、行儀の良い紳士淑女が口にして意味が通りやすいようにその論理を貶めてしまったと糾弾している。また、古代から続く物語にしても、その時代背景や社会制度を飛び越して「精神分析」は全ての原因を「性的衝動」に結び付けて論じるようになってしまった点を挙げている。

ボーデンハイムはそのような人々が文学に関わることによってアメリカの小説が「感覚的なメロドラマ」に変質してしまい、そうした安っぽいメロドラマの後ろには「全てのものが性的な衝動と結びついていると考える精神分析家達」が潜んでいることを嘆いている。

では、ボーデンハイム自身はこうした「性的衝動至上主義」の精神分析家達に対抗するものとしてどのような考え方をしていたのであろうか。彼は次のように述べている。

人はこれまで二つの部分に分かれてきたのである。一つはある形を持った感覚的な勝利への渴望であり、もう一つは精神的美的多様性を求める欲望である。これら二つは永遠に人間の心の中で闘いを続け、両方が同等の力を持っているからこそ、お互いが拮抗して存在してきた。(中略) 感覚的な満足の独りよがりの単調さを決定的に侵略したある性質、つまり無情な敵によってこれらの衝動は悩まされてきたので、男と女はうそや嫉妬、残虐さや栄光、苦しみを通して彼らの性的な衝動を導いてきたのである⁴⁷⁾。

このように、ボーデンハイムはドラマを構成する上では複数の思想や要素が絡んで成立するプロットが存在するにも関わらず、精神分析家がそれを改変して全てを性的衝動の一元論に帰着させてしまった功罪を述べている。

こうしたボーデンハイムの議論は、そのままその後のアメリカ文学における精神分析批評の問題点としても提起されていった。しかしながら、ボーデンハイム自身は飽くまで「心理学万能ブーム」の原因はフロイトやユング本人や彼らが精緻化していった心理学の理論にあるわけ

ではなく、それを捻じ曲げて無理矢理結びつけた「出来の悪い弟子達」にあると限定しているのが特徴として挙げられよう。

b) ストールバーグによる「心理学の墮落」説

The Bookman の編集者であり、*New York Evening Post* のコラムニストとしても活躍していた労働史家であるベンジャミン・ストールバーグ (Benjamin Stolberg) は *The Nation* (1930 年 10 月 15 日号) に寄稿した「アメリカ心理学の墮落」という論説によって、アメリカにおける心理学がいかに大衆化の波の中で「墮落 (degrade)」していったかを述べている。

ストールバーグはアメリカの哲学の源泉はプラグマティズムにあると断った上で「プラグマティズムは哲学的ではなく行動主義的になり、それが絶えず成長してきた心理学における同一性を反映しており、それが大学教授からフラッパーに至るまである種の興奮した楽観主義をもってアメリカ人の人生に統合されてきた」⁴⁸⁾ と定義づけている。

こうした行動主義的・実践的なアメリカ人の特徴と心理学が結びついた末に生産されたものとしてストールバーグが挙げているのが「心理学的文学」であり、「現在最も魅力ある心理学的文学のひとつは、社会的正義を『応用社会学』という名で貧弱にした好奇心からの、意味のない、えせ科学的な弁解の専門用語を並べたものである」⁴⁹⁾ との分析を加えている。

また、労働問題を専門にしたストールバーグらしく、彼がもっとも力点を置いているのは「『心理学テスト』乃至『知能テスト』産業への無反省な応用」であり、「(しかし) それらは人間の価値をはかる基準としては全く意味を持たないものである。(だが) それらのテストはビジネスの分野においてますます熱狂的に用いられている」⁵⁰⁾ と「科学的蓋然性」を帯びたテストを無条件に信奉している産業界の態度を糾弾している。

この蓋然性に寄与した中心人物としてストールバーグが批判しているのはジョン・ワトソン (John Broadus Watson, 1878-1958) であり、彼を「『遺伝的』心理学の『創設者』」であると断言している。ストールバーグは、ワトソンはフロイトをも「ウィーン出身のメフィスト」と呼び、非難し現在のアメリカの精神医学に対する忌避の視線と同様に嫌っており、ワトソンはフロイトとは無関係の視点で自分自身の心理学を唱えた、と記述している。これがワトソンの立ち上げた「社会心理学」であり、「社会的怪物に対する『条件反射』の『遺伝的な』研究以外の何者でもない」⁵¹⁾ としつつも、ワトソンがアメリカの心理学の大きな潮流の原因となった点については否定的ながらも認めている。しかしストールバーグはワトソンに対しては「彼こそが今広告の『行列』を作り、アメリカの大衆を意味のない商品を大量生産させている主要な心理学的な指導者」であると鋭く批判している。また、ストールバーグは「カルヴィン・クーリッジこそが我々の最も偉大な文学の天才である」と風刺した上で、「無数の『大衆の』心理学に関する本や雑誌が市場に溢れている」こともまた批判の俎上に上げている。ワトソンの行動主義派心理学は研究室をすぐさま飛び出して、ウォルター・B・ピトキン (Walter Boughton

Pitkin, 1878-1953)などに伝播し、心理学というよりは自助論を展開するようになってしまった、と悲観的に述べている。『幸福の心理学』(*Psychology of Happiness*, 1929)を主著書とするピトキンの「判りやすい心理学」は「スーパーセールスマン」が天才である理由を捏造し、また、ベーブ・ルースに関して「彼は天才なのだからけち臭い8万ドルのサラリーよりも、年間に打ったホームランの本数を考えると統計学的に見ても年に1000万ドルもらってもおかしくない」という極端な結論まで飛び出しているアメリカの心理学界について悲観的な態度を崩していない。「制度化された金権政治が哲学を作り出し、『科学的な』方法を作り出し、心理学的な弁護を作り出している」⁵²⁾というストールバーグの議論は、ちょうど「暗黒の木曜日」から1年が経とうとしている時期に発表されたことから考えても「心理学者が資本家と結託して金権政治を作り出し、その結果大恐慌を起こしてしまったのだ」という、当時の資本主義批判の視点を如実に反映したもののだとも考えられる。

ここで前項において述べたボーデンハイムとストールバーグとの違いを簡単にまとめておくと、ボーデンハイムがフロイトや精神分析、科学としての心理学そのものは「学究的なもの」としてその正当性を認めているのに対して、ストールバーグはその学究を極めるべき心理学者自体が既に圧倒的な資本の前に腐敗せざるを得なかったというラディカルな見方を貫いているのが特徴である。

いずれにせよ、両者とも両大戦間期のバブル景気が「心理学」というイメージなり、また心理学そのものを変質させる原因となったと見なしている点は一致しているといえよう。

6. 結 び

本章においては、第2章から第5章までで取り上げた事例から導き出され得る結論について述べていく。

議論の関係上、章順には取り上げられないが、まず、第4章と第5章で取り上げた *The Nation*, *The Outlook*, *The Forum* といった雑誌は当時の発行部数（おおよそ20万部前後だったと推定されている）を考えると、専門家や学術研究者以外の読者層も想定した大衆雑誌だったと考えることができよう。

そしてそれらの雑誌の中で「心理学」や「精神分析」、「フロイト」などの言葉が論考の筆者によって扱われるとき、ハミルトン以外の著者は一様に、こうした単語が学術専門用語の枠を超えて「墮落」してしまったことを問題視しているのが特徴と言えよう。ストールバーグ以外の殆どの著者が学問専門領域として心理学を研究している専門家であることから、「その道の専門家からの一言」という形で「多くの『字が読める』人々が晒されている世界においての『心理学』『精神分析』という言葉や『フロイト』という人物に関するイメージは大きく捻じ曲げられている」現状に対して何とかして「本来あるべき正しい姿」を伝えよう、もしくは

「大衆がいかにかこれらの言葉を誤用しているか」を指摘して専門家の立場から訂正しようという、一種の教化を自らの論に課している姿勢が読み取れる。

また、彼らが教化して矯正を試みなければならないほど、当時の大衆社会においては専門用語としてではなく「宣伝用語」として「心理学」「精神分析」「フロイト」という言葉が資本家や詐欺師や似非医者達によって搾取的に利用されていたことも指摘できるだろう。

それでは、何故専門家がそこまで必死になって「真の心理学理論」についての教化に努める姿勢をとらねばならない状況が生み出されたのであろうか。

これに対する答えとしては、前各章でも取り上げたが、三つの理由が挙げられる。

一つ目としては、心理学という学問が両大戦間期当時は、学問分野として成立し認識されて間もない若い学問分野であったことが挙げられる。このことを肯定的に見るとすれば、成立して日が浅い学問は勿論知的探求の為には非常に刺激的で、未開拓な分大きな将来性と可能性を秘めたものであると言える。しかし、一方で否定的に見るとすれば、未開拓である分、研究者の資質によっては如何様にも解釈できる危険性を孕んでいる。先行研究がそれほど多くない分、研究者は手探りで自らの議論を精緻化していかなければならないが、その途上において学問的に疑問の余地が残される分野の知識や一般的な当時の社会文化的風土に影響されやすい。例えば、ここで挙げられるのはイギリス出身で後にアメリカでハーヴァード大やデューク大で心理学者として活躍したウィリアム・マクドゥーガル (William McDougall, 1871-1938) は心理学の研究をする一方で優生学に関する数々の著作を残している。『アメリカは民主主義にとって安全であるか (Is America Safe for Democracy?)』という 1921 年の彼の論考においては優生学と心理学の考え方を融合させ、当時問題視されていた東欧系や南欧系の新移民やアフリカ系アメリカ人の知能指数が旧移民の白人の平均知能指数よりも極端に低いことを例に挙げて「このような『低能』で『未熟練労働』にしか向いていない新移民たちをこれ以上受け入れていいのだろうか?」「アメリカは優生学的に優秀である Nordic の貴い血筋を新移民との混血によって失ってしまうが、そのような国は民主主義国家として成り立つか?」などと論じている⁵³⁾。

このような優生学的ディスクールは現在では人種差別・民族差別的見地から否定的に見られ、また、知能テストの正当性に関しても疑問に付されているが、両大戦間期当時においてはマクドゥーガルのような考え方を持つ旧移民のアメリカの白人は寧ろ多数を占めており、加えて知能テストに関しても「科学的に人間を正しく分析できる尺度」として心理学や教育学の分野において常套的に使われていた。ここでストールバーグの議論を再び持ち出すまでもなく、当時の心理学は新しいが故に様々な社会的コンテクスト（「いかがわしい」とされるものも含む）で使われ、変容していく余地があったがために、「誤用」が起きてしまったと考えられるのではないだろうか。

二つ目の理由としては、心理学のなかでもフロイトの精神分析論についての特徴が挙げられる。「リビドー」や「エディプス・コンプレックス」というフロイトが精緻化した用語を見て

も、フロイトが心理学理論において「性」という概念を主眼に置いた展開をしているがために、専門知識がさほどない人々の間で使われる時には一種ポルノグラフィ的好奇心をもって扱われてしまう危険性を孕んでいた。これは第4章と第5章においてイラストを交えた議論でも取り扱ったが、「リビドー」や「無意識」「超自我」といった専門用語にフロイトが本来意図していた意味とは違う意味が付与されてしまい「そこらのパーラーやティーハウスでフロイトを知らない若者たちがフロイトの用語で冗談を飛ばしあう状態」が現出してしまったのである。第5章の図4のロウブラウなカップルであるレムとレナがあれこれと全く見当違いのことを話しながら手にしている本のタイトルらしきものに“Freud”と書かれているのはそれを象徴するとも言えないだろうか。勿論、このイラストを自らの論考を示すものとして取り上げたウェンブリッジの考えの中には「ロウブラウはフロイトを誤解している」と一段上のヒエラルキーにいる立場からの冷たい視線を示したかったのであろうが、逆に、ここで「フロイト」とわざわざ本に特定の固有名を記すことによって、「ロウブラウですら『フロイト』という言葉を知っていて、正しい解釈ではないにせよ、ロウブラウの間で『フロイト』に関してはある一定のイメージが出来上がってしまっている」という苦い現実をも提示しているものではないだろうか。

三つ目としては、第4章において詳しく取り上げたが、両大戦間期のアメリカの社会状況が「心理学の誤用」と専門家が嘆くプロセスの形成に寄与するところが大きかったことが上げられる。戦禍を免れ、世界経済の中心となり、好景気及びバブル景気に沸いた両大戦間期においては、余剰となった資本によって金権政治が横行し、また「金さえあれば何でも解決できる」という資本万能論が幅を利かせていた時代でもあった。こうした余剰資本と「似非心理学」が結びつくことによって「精神分析」や「心理学」がオカルティズムや神秘主義と結びついて「性格分析」化し、また出版界が印刷物を大量生産する体制が整えられたことによって、本来であれば重篤な疾患を持つ病人に対してのみ行われていた精神分析が識字を持つ一般の人々にとっても「わかりやすく自分を判断し不安を解消してくれるもの」として応用可能だと思込み、次々と飛び付くことになった。ここで、ジョン・ヒドリー・ブルック (John Hedley Brook, b.1944) が両大戦間期当時の金権主義と精神分析との親和性について「カール・マルクスの審判のように、宗教が大衆の阿片であったならば、精神分析への信仰は、畢竟、ブルジョアジーの新しい麻薬であった」⁵⁴⁾ という議論が良い証拠を提供してくれるだろう。

つまり、好景気やバブル景気によって資本を得た人々や、生活水準が上昇した人々が次に求めるものは「自己存在の正当性」であり、自分自身の存在が「理論的・科学的に正当である」と証明されることを願っていた。それは、生活を維持していくだけで精一杯の状況から多くの労働者が解放されたことを意味すると同時に、彼らは「自分とは何か？」という根本的な問いを持つようになったことをも意味する。勿論、その答えは哲学的な探求の中に見出すことも可能であるが、多くの「識字のある」(しかし、深く探求するまでには至らない) 人々にとって

哲学は余りに「高尚」に映り、また、千年以上も探求されてきた哲学の歴史を、時系列を追って全て紐解くに必要な専門的知識を積むことは時間的な無駄だと考えた。

そこに突如として「あなたはこのような性格を持っていますからこうした方が生活しやすいですよ」と判りやすく説明し、自己同定の作業を簡易かつ簡潔に行ってくれるものとして「似非医者」や「精神分析家」や「応用心理学クラブ」といった存在が現れれば、自己存在についての疑問は一時的にせよ、また科学的ではないにせよ、解決される。ここにそれまで支配的な文化であった過度に性的行為を隠蔽するヴィクトリア朝文化の価値観を否定し、性的表象を堂々と掲げたフロイト心理学の「リビドー」や「無意識」といった言葉が独り歩きする余地が生まれた。両大戦間期アメリカにおいて資本主義を支えた人々が常に抱えていたのは「自己存在に関する不安」であり、そうした人々の間で「自分を知る為の手取り早い解決手段」としての「大衆にとっての心理学」や科学言説としての心理学万能論が生まれ、隆盛する余地が生まれたと考えられるのではないだろうか。

注

- 1) Alexandra Sacks and George Makari, "Freud in the New World," *American Journal of Psychiatry* 166: 6, June 2009.
- 2) F. Scott Fitzgerald, *Tender is the Night* (New York: Scribner's, 1934) より。現代語訳は荒地出版社『現代アメリカ文学全集 3 フィッツジェラルド』(1957年)より、229.
- 3) 同書, 363.
- 4) 同書, 369.
- 5) U.S. Department of Commerce, Bureau of Census, Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970などを統合して1992年9月にNAALが表として換算したものである。引用元はアメリカ教育省の科学教育課のオフィシャルサイトより。(http://nces.ed.gov/naal/lit_history.asp 2010年9月10日取得)
- 6) 大島良行『『風と共に去りぬ』の女たち——ミッチェルの生き方とアメリカ南部』(1996年、専修大学出版局) 55 ページ。
- 7) 1936年4月28日付け、ミッチェルがジュリア・コリアー・ハリスに宛てた手紙(a)と同年7月11日付け、マーク・アレン・パットン博士に宛てた手紙(b)から。いずれも出典元はRichard Harwell, *Margaret Mitchell's Gone with the Wind Letters, 1936-1949* (London: Sedgwick & Jackson, 1987) (a) は4, (b) は42より。
- 8) Darden Asbury Pyron, *Southern Daughter: The Life of Margaret Mitchell* (New York: Oxford University Press, 1991) 83, 478.
- 9) Ibid., 84.
- 10) George Sylvester Viereck, "Freud: The Columbus of the Unconscious," in the essay of "Is Psycho-Analysis A Science?" *The Forum*, No. 73, March, 1925, 302-320.
- 11) Ibid., 310.
- 12) Ibid., 310.
- 13) Ibid., 310.
- 14) Ibid., 307.
- 15) *The Forum* は1886年～1930年まで刊行された大衆向け雑誌であり、1930年には*The Century*を買収し、1940年まで*The Forum and Century*として刊行された。刊行部数はおおよそ最盛期で20万部。
- 16) G. V. Hamilton, "Our Wanting Machine," *The Forum*, April, 1930, 228-233.

- 17) Ibid., 232.
- 18) A. A. Roback, "Quacks," *The Forum*, May, 1929, 263-269.
- 19) Ibid., 263.
- 20) Ibid., 264.
- 21) Ibid., 265.
- 22) Ibid., 266.
- 23) Ibid., 266-267.
- 24) Ibid., 269.
- 25) Karl Menninger, "Pseudoanalysis: Perils of Freudian Verbalisms," *Outlook and Independent*, July 9, 1930, 363-397.
- 26) Ibid., 363.
- 27) Ibid., 363.
- 28) Ibid., 364.
- 29) Ibid., 365.
- 30) Thomas Laqueur, *Making SEX: Body and Gender from the Greeks to Freud* (Harvard University Press, 1990)『セックスの発明 性差の観念史と解剖学のアポリア』[高井宏子・細谷等訳 1998年, 工作舎] 214-248.
- 31) 同書, 236.
- 32) 同書, 316.
- 33) 同書, 317.
- 34) 同書, 326.
- 35) Eleanor Rowland Wembridge, "Psychology for Lowbrows," *The Survey*, April 15, 1927, 707.
- 36) 紙面の都合上掲載しなかったがナディーンは漫画のキャラクターとしては「典型的なフラッパー」として描かれ風刺化されており, 「フラッパー=現代っ子=神経症持ち」という暗黙のうちの理解に関して漫画を読む側が記号として受け取ることができる仕組みになっている。
- 37) Ibid., 705.
- 38) Ibid., 705.
- 39) Ibid., 705.
- 40) Ibid., 706.
- 41) Ibid., 706.
- 42) Lawrence W. Levine, *Highbrow/Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America* (Harvard University Press, 1988)『ハイブラウ/ロウブラウ アメリカにおける文化ヒエラルキーの出現』[常山菜穂子訳 2005年, 慶應義塾大学出版会] 288-305.
- 43) Martha Guernsey Colby, "Psychologists — So and Pseudo," *The Outlook*, June 3, 1928, 364.
- 44) Ibid., 364.
- 45) Ibid., 365.
- 46) Maxwell Bodenheim, "Psychoanalysis and American Fiction," *The Nation* Vol. 114 No. 2970, 683.
- 47) Ibid., 684.
- 48) Benjamin Stolberg, "Degradation of American Psychology," *The Nation* Vol. 131 No. 3406, 395.
- 49) Ibid., 395.
- 50) Ibid., 396.
- 51) Ibid., 397.
- 52) Ibid., 398.
- 53) William McDougall, *Is America Safe for Democracy?* (New York: Scribner's, 1921) 63-71.
- 54) John Hedley Brooke, *Science and Religion: Some Historical Perspective by John Hedley Brooke* (Cambridge University Press: 1991)『科学と宗教 合理的自然観のパラドクス』[田中靖夫訳 2005年, 工作舎] 352.

Freud, Psychology and Psychoanalysis as Scientific Discourse

— The Popular Reception of Freud and Psychology in the Popular Magazines
and Literature in the Period between the Great Wars in the United States —

Megumi OGURA

Abstract

In popular magazines and novels published between the Great Wars in the United States, the words such as “Freud,” “Psychology,” and “Psychoanalysis” often appeared. In many novels and with many playwritings, the author assumed that the reader or audience had already known of Freudian theory or Freud himself, while many columnists in popular magazines lamented that Freudian theory had been misunderstood and that psychology itself had been degraded. These attitudes vividly reflect the then American social circumstances and uneasiness among the general population of the twenties and thirties.

Keywords: the United States’ cultural history between the Great Wars, Freud, psychoanalysis,
popular magazines, psychology